

週刊メッセージ “ユナタン” 10

センター（コーナー&ゾーン）と担任、担当の役割

平成 27 年 12 月 2 日 片山喜章

11月20日と24日、A園とB園、2つの園で「保育環境評価と公開保育」（この取り組みは「ユナタン」7でも紹介）が行われました。ふつう、クラスが在って、その中心に担任が居て、そこにクラスの仲間たちが集って活動する。誰もがイメージする保育室の風景です。

しかし、この2つの園の実践から、そのイメージが変わりつつあることが伺えます。担任以外の保育者が担当者としてクラスにかかわる。今後、全園が探究する1つの保育の形です。

20日のA園の公開保育では、異年齢のコーナー保育と並行して、ある時間になると、造形ゾーンがオープンし、5歳児の有志男児が集合しました。《海賊バッド》という自分たちが膨らませた物語に乗かって、たくさんのダンボールにまみれ、いくつもの船を制作していました。

「どうすればここを曲げられる?」「ここを切るのはむずかしい!」「こことここは、何でくっつける?」など、悪戦苦闘する会話がしびきをあげて飛び交います。当日の評価者は、大学教授、幼稚園の先生、法人内職員をふくめて14名いました。私がある場面をじっと観察していると、そこへ、ある評価者が入ってきて、立ち止まり、笑みを浮かべて「すごいね」って、一言残して、他の保育室へ立ち去りました。その瞬間、なぜか“むむむっ”と不快感が打ち寄せたのでした。

なぜでしょう? 「すごいね」って…、それ、子どもを本気で人として見てないじゃん! その時、その場で、長らく悪戦苦闘している彼らの姿を眺めているうちに、私自身、困難に立ち向かう人々のドキュメンタリーを見ているような気になったのでしょ。最大限に頭脳をはたらかせ、友達を同志と感じ、船の制作に打ち込んでいる人間の姿です。これまでなら「子どもどうしの有意義な活動」と上から評するのに、この時ばかりは“今を懸命に生きる人々の輝き”と感じ取れたのでしょ、なので、笑みを浮かべて、ただ「すごいね」って言う評価者に“むむむっ…”。

概して、私たちは、子どもを子供扱いし、先生の意図をくみ取って、はきはきと物言う姿をすばらしい子と評価してしまいます。そして、うまくできた事を教育の成果だと認識します。まちがいだとは言えません。現に私たちは、子どもたちにテーマを投げかけ、それを“できるようにしたい”という欲求に育てあげ、欲求に応えるための手立てを創出してきました。けれども、この場面は、自由意思で参加しています。彼ら自身が自分に課したテーマに挑んでいるのです。

このような『コーナー（積み木、ゲームなど）』『ゾーン（物と物語づくり、器楽演奏など）』はアメリカでは総じて『センター』と称しているようです。今後、各園が『センター』を如何に、日常保育に組み入れて、より豊かに発展させるか、各様の道筋が輝くことを期待しています。

《海賊バッド》の場面、この時、悪戦苦闘する子どもたちに寄り添っていたのは、担任ではなくて、フリーの保育者でした。彼は《海賊バッド》が誕生した頃からずっと5歳児男児と共に、この制作活動の担当者としてかかわっていました。制作は、海賊の物語とともに進展します。

またこの日、他の部屋では、6種類の楽器が用意され、リズム打ちをしていました。人数制限が設けられ、この日は3、4歳児を中心に13名の子どもが集まりました。1曲終わる度に楽器を交換します。いろんな楽器でいろんな拍子を打っているうちに、笑顔もきらきら輝きます。

この活動は日常的に定着しており、このゾーンを受け持つベテランの保育者は、これ以外に、5歳児の女の子たちの歌とダンスチーム《リズムの妖精》の顧問兼指導者も務めています。

A園の5歳児は午睡がないので、午後2時くらいになると、担任が書き物作業や休憩をしている間に、この2人が、折に触れ、《海賊バッド》と《リズムの妖精》をプロジェクト活動として推し進めます。担任は、報告をうけて「すごいね」って、ただニンマリするだけです。

24日、B園の保育環境評価と公開保育の対象は、2歳児でした。コーナーでの活動、絵本を読んでもらってから園庭で遊び、その後、屋上に上がってサーキット運動。そして、部屋に戻ると玩具棚を3台、組み合わせて、暗幕で覆い隠した「シアター」がありました。観客席もきちんと整っています。子どもたちは着席し、隣の1歳児、0歳児も参加して、いざ、ショータイム。

手遊び、遊び歌、エプロンシアター。進行するのは、全身、黒づくめの「おねえさん」が3人。その日、園見学や園庭開放で観賞していた10人くらいの人たちも「あの人たちはプロですか」と尋ねるほど、うっとりするような進行で、子どもたちとのやりとりも活気のあるものでした。

進行していたのは、主任と0歳児担任とその時までサブにまわっていた2歳児の担任でした。この時間だけ、黒の衣装に替えて、“エンターテイナー”に変身です。進行が流暢だと、子どもたちの反応も冴えます。深みや鋭さがありました。これは毎月の行事です。なので、多くの2歳児が、0歳児の時から「シアター」に慣れ親しんでいるぶん、そこに幼児が居ないぶん、そばに0、1歳児が居るぶん、2歳児の応答力は高く、返しの言葉にも勢いや伸びが感じられます。乳児の担任は輪番にクラスを越えて“エンターテイナー”として、この日に備えて腕を磨きます。

子どもたちも担任の先生とは別の“お話のおねえさん”として受けとめているようでした。

「保育者の専門性」「保育者集団の連携」「脱クラス主義の保育形態」、子どもたちに本物の力をつけるための三位一体のテーマです。子どもの中にコマ名人、あやとり名人がいるように、いま、各保育者が得意な分野を活かして「教材研究」に打ち込む“エンタな先生集団づくり”をめざしているところです。それは分業と協業と連帯による新たな園運営のはじまりです。